

幕末の大砲製造と人々の暮らし

会員 西村洋一

はじめに

幕末、人々の暮らしを苦しめたのは大災害だけではなく。幕府や薩摩、長州といった雄藩が軍艦や武器の購入、大砲製造といった戦費に金を費やすことで、インフレの大波が押し寄せたのである。安政六年（一八五九）から元治元年（一八六四）までの六年間で、都市部を中心に生活必需品が四倍に跳ね上がり、金座・銀座は新たな貨幣製造に苦慮した。この困窮を尻目に日本の金銀流出で潤ったのは、賠償金目当てのイギリスや武器転売国フランスであった。大砲製造といえは兵学者佐久間象山に次のような逸話が残っている。

嘉永四年（一八五二）五月、象山は松前藩の依頼を受けて上総の姉ヶ崎海岸で洋式大砲の試射を行ったが、四発目で砲身が破裂し大砲は全壊、観衆から大笑いされた。自尊心の塊のような象山、松前藩の担当役人から咎められたときも、「失敗するから成功がある。もつと費用を出しなさい」と豪語した。

『大玉池砲を二つに佐久間修理この面目をなんと象山』於玉ヶ池は東京都千代田区岩本町二丁目五番地辺りにあった池の名で、当時近隣にあった御茶屋の看板娘お玉からこの名が付いたという。まるでまんがのような狂歌だが、それほど当時大砲は民衆に興味関心を与えていた。

これに比べ佐賀藩の科学技術は本物だった。象山が庶民に笑われていた頃、藩主鍋島閑叟（さうかん）が指揮する科学技術班は日本初の反射炉を建設、鋼の製造を繰り返してその技術を磨いていった。こうして十数年後には英国でも真似できない新式の大砲製造に成功している。

― 嘉永年間

さて黒船の浦賀来航で、合計七十三門もの大砲を目にした民衆は驚愕したが、その頃防長両国は大早魃（だいかげつ）に見舞われていた。

『毛利十一代史』によると嘉永六年（一八五三）五月十九日から八月一日まで雨が降らず大早魃、秋洪水、防長被害二十万七千七百石、そんな矢先にペリーが来た。

嘉永六年六月三日夕刻、ペリーが浦賀に来航、当時の瓦版報告書によると、

『異国船大二隻、小二隻、合わせて四隻が近づいてきた。四隻とも帆を下げ、北に向かっている。小舟は何れも大船に牽ひかれ大船は煙を上げて走っている』

象山の弟子となった松陰がこの黒船を遠望観察して、

後に宮部鼎藏（ていざう）に送った手紙の内容は次のようであった。「来年、ペリリ提督が国書の回答を受け取りにやってくるそうです。そのときは我が日本刀の切れ味を見せたいものです」

六月、萩藩士来原良蔵が浦賀周辺の形勢を視察、このとき良蔵は伊藤利輔（後の博文）の周旋能力を見込んで部下とし、松下村塾への入塾を勧めている。

一方萩藩では郡司喜平治を大砲製造用掛に命じ、松本村にある郡司家の工場を大砲製造所とした。以後、喜平治は洋式カノン砲を作ることに全精力を傾け、生涯に百三十もの青銅製大砲を製造している。

嘉永七年（一八五四）一月十六日、再びペリーが浦賀に来航。

三月五日、密航を前に江戸京橋の酒樓伊勢広で松陰の送別会が催された。

長州藩士の来原良蔵、白井小助、赤川淡水（あかみづ）、坪井竹槌、小浜藩士の梅田雲浜、肥後藩士の宮部鼎蔵とその門弟佐々淳次郎、松田重助、永島三平らが集う中、松陰の

口から密航計画が打ち明けられたのである。

この計画を知らなかった松陰の門弟赤川淡水は驚愕した。

実はこの赤川淡水、徳山とゆかりのある人物である。それは彼の生い立ちを探っていけば分かる。彼は萩平安古中村家に生まれた。幼名を直次郎といい、兄は中村九郎、これで気がついた方も多いだろうが、後の佐久間佐兵衛、あの野山獄で斬首された四参謀兄弟である。彼は萩藩士中村儀右衛門の次男だが、生まれて数カ月で父親を喪ったことから、叔父の赤川又兵衛の養子となつて、赤川直次郎と称して周防室積村で成長したのである。

義兄の又太郎が徳山の遠石八幡宮黒神直民に従学したため、直次郎もこれに従つて国学や漢詩を学んだ。また右田の儒者大田稻香に砲術を学び、十五才で藩校明倫館に入つて松陰から兵学を学んでいる。

II 安政・万延年間

さて黒船の次に待っていたのが安政の大地震、まさしく平成の世に起こった東日本大震災レベルの災害規模

だった。

『下松市史』によると嘉永七年（一八五四）十一月五日夕方、防長両国に地震、徳山地方強震。発生時刻からすれば安政南海地震の方である。また被害状況から見ると震度五強ほどの揺れだったようである。

このとき国交樹立を求めて伊豆下田に碇泊していた露艦ディアナ号は、この大地震による津波で破損、港に曳航中、宮島村沖で沈没した。

『海事集録』によると乗組員五百名は伝馬船で救出、君沢郡戸田村の寺社や新築された宿舎で生活、プチャーチン提督は宝泉寺に宿泊した。ロシアに帰る船を失くした提督は幕府に帰国用の帆船建造を依頼したのである。これを受け、戸田村の船大工と露人が共同で帆船を建造することになった。

沈んだディアナ号から持ち出された図面を基に、言語や単位が異なる不都合を乗り越え、全長二十五Mの帆船十隻が建造されて戸田^だ号と名付けられた。

この頃萩の大砲鑄造所で郡司喜平治が砲身百八十六セ

ンチ、重さ一トンもの青銅製大砲を鑄造、後に下関戦争で使用された。『下松市史』によると安政二年（一八五五）、防長両国は鑄砲のため民間の銅器を鑄造局が買い上げていた。どうやら金属供出は太平洋戦争だけではなかったようである。

安政三年（一八五六）六月二十八日、幕府が安政二分判の運用を開始。この安政二分判は低品位金貨として発行された二分金、金含有量は三割ほどに抑えられていた。

この安政二分判が流通した頃から全国の大商人が私腹を肥やしていく。一方武士の間では大砲ブーム一色、徳山藩でも侍の教育内容が変遷していく。

安政四年（一八五七）三月朔日、徳山藩が西洋流砲術の教授を開始する。

さて地震の次に庶民を襲ったのが安政コロリ、二度目のコレラ大流行である。感染は長崎出島から始まり、日本全土に蔓延していった。

安政五年（一八五八）八月三十日、徳山藩で悪疫が流行、消毒用養生湯が設けられる。

文政五年（一八二二）以来、三十六年ぶり二度目のコレラが大流行したのである。六月、長崎に入港した米海軍艦ミシシッピー号の水兵がコレラを発症、九州、上方、東海道筋を経て七月には江戸に至り、以後三年も大流行、十万人を越える死者を出し、庶民から安政コロリと呼ばれて恐れられた。

九月、中嶋治平がコレラの予防法を萩藩に急報する。これにより、中嶋治平は官費伝習生として士籍に列せられた。

十月九日暁七つ、来原良蔵が手付の伊藤利輔と中間の政吉を連れ、萩から長崎へ向かう。長崎の海軍伝習に加わり西洋砲術を学ぶためであった。

伊藤利輔はオランダ教師ハント・ローエンから小銃雷管の製造法を学んだが、ローエンはすこぶる厳格な教師で、利輔は容赦なく矯正されたと言う。

安政六年（一八五九）、この時期になると萩藩の御用商人が幅を利かすようになる。西市の『中野家文書』によれば、この年の九月十六日、萩藩御用商人中野半左衛

門が佐波川の通船工事を開始、同年十二月十五日に竣工している。

十二月二十七日、政字銀が通用開始。政字銀とは政の字が刻印された丁銀と豆板銀のことで、金の安値を招いて数十万両にも及ぶ金が国外に流出した。

安政七年（一八六〇）三月三日、雪の降る朝、桜田門前で大老井伊直弼を浪士たちが襲撃、駕籠から引きずり出し、「キエエーイッ」という猿叫と共に一刀両断、あれよという間に首級を挙げたのは薩摩浪士有村次左衛門だった。これを訊いた久坂玄瑞は松陰の仇討ちとなったとして、その日の日記に「快い報せ」と記している。

万延元年（一八六〇）四月十日、幕府が万延二分判の通用を開始、金の国外流失が弱まった。

幕府はさらに金の含有量を抑えるため、二分金の重量を一匁の八割、つまり今の重さの三グラムに下げ、見た目の輝きだけは安政二分金並に保った。

五月二十七日、徳山藩士飯田忠彦が桜田門外の変の嫌疑をかけられたことに憤慨して抗議の自刃を遂げてい

る。

III 文久年間

さてコレラの次に庶民を悩ませたのが帝国ロシアの南下政策だった。たった六年前に戸田号を造ってあげたのに、恩を忘れたロシアはとんでもない行動に出たのである。世に言うポサドニック号事件である。

万延二年（一八六一）二月三日、ロシアの軍艦ポサドニック号が対馬の尾崎浦沖に投錨、藩主宗義和は使節を派遣して口頭と筆談で質したところ、艦名ポサドニック号、艦長ビリリヨフ、乗組員三百六十人と分かり、航行中に船が破損したので当地で修理をしたいとの回答であった。

文久元年（一八六一）三月四日、ポサドニック号の乗組員が無断で芋崎に上陸して兵舎の建設などを始めた。その後も船体修理を名目に工場や練兵場を建設する。

これに対して対馬藩は問状使をポサドニック号に派遣、不法を何度も尋問、しかしロシア側は無回答を貫き、島内を荒らし傍若無人となった。さらに艦長は再三藩主

へ面会を要求、三月二十三日には芋崎の租借を求めて来た。

四月十二日、ロシア兵が藩警備員松村安五郎を銃殺、さらに郷士二名を捕虜としてロシア船に連行して拉致監禁、事態はどんどん悪化し、ついには幕府が対応する事態にまで進展していった。その後八月十五日に、ポサドニツク号は対馬から退去している。

文久二年（一八六二）一月十五日、老中安藤正信が水戸浪士に襲われて負傷する。

二月十一日、和宮親子内親王が降嫁、公武合体が成立する。

九月、徳山藩士信田作太夫と遠藤貞一郎は攘夷派の公卿姉小路公知きんちが勅使として江戸へ赴く際に護衛役として追従した。

文久三年（一八六三）四月、將軍徳川家茂が攘夷決行の期限を五月十日に決定する。

五月十一日夜八つ、久坂玄瑞が米商船ペンブローク号の砲撃を発令。長州藩士による攘夷決行となった。その

翌日、長州藩の志道しじ（井上）聞多や伊藤俊輔ら青年五名が、英国留学に向けて密かに横浜を出航した。

五月二十日深夜、かつて徳山藩士の信田と遠藤が護衛した公卿姉小路公知の命が狙われた。翌朝、現場には人斬り新兵衛の差料が落ちていた。

五月二十日午後十一時過ぎ、朝議を終え屋敷に戻っていた姉小路が京都朔平門外の猿ヶ辻に差し掛かったとき、覆面をした男が襲いかかった。

姉小路は一撃を中啓で受け流し、太刀持ちの金輪勇に「太刀！」と叫んだが、金輪は太刀を抱えたまま逃げ去ってしまった。警護の吉村左京がこれを追うと、別のふたりが公知に襲い掛かり、頭部を斬りつけられ胸を突かれた。

左京が引き返して応戦すると襲撃者のひとりりが刀を投げつけて暗がりの中へ逃げ込んでしまった。公知は左京の肩にすがって五町ほど離れた自邸に戻ると、玄関で「枕！」と叫んで昏倒、そのまま死亡した。

翌朝、青侍の戸田鵬熱と吉村左京が現場に行ってみる

と刀と下駄が転がっていた。その刀が田中新兵衛の差料である忠重であり下駄は薩摩下駄であった。この数日前に田中新兵衛は三本木の料理屋で刀を盗まれていた。残された刀や下駄、傷跡から刺客は田中新兵衛だとされた。

六月十日、適塾の緒方洪庵が死去。適塾とは大坂瓦町にあった蘭学の私塾、塾頭の三代から六代までは長州の久坂玄機・大村益次郎（村田蔵六）・飯田柔平・伊藤慎蔵が務め、あの手塚治虫の曾祖父手塚良仙も塾生だった。

六月十日夜、厠から出たばかりの村田蔵六と福沢諭吉が向き合った。この夜は緒方洪庵の通夜であったが、突然福沢が口火を切った。

「どうだ、馬関では大変なことをやったじゃないか。呆れ返った話じゃないか」

すると村田が眼に角を立て一気に吐いた。

「なんだとーやったらどうだ。長州ではちゃんと国是が決まっている。あんな奴らにわがまをされてたまるものか。これを打ち払うのは当然だ。もう防長士民はこことごく死に尽くしても許しはせぬ。どこまでもやるの

だ！」

その劍幕たるや、福沢の知るそれまでの村田ではなかった。

六月、徳山藩の家臣が銃砲のため領内の梵鐘ならびに銅器類を集めさせる。

六月、萩藩庁は幕府の詰問使が乗った朝陽丸を小郡へ廻させた。

七月、藩主毛利敬親が藩庁を萩から山口に移転することを公表した。

七月十六日、幕府の詰問使中根市之丞と従者が暗殺された。朝陽丸事件後に起こった三原屋事件である。中根一行を襲った実行犯は石川小五郎・大涛緩おほなほろみ・藤村六郎が主導する壮士一団だったと伝えられている。このうち大涛緩は周防三丘村の有馬幸次、藩士有馬基宗の次男で幼名を竹之進と呼んだ。

大涛はこの年七月に奇兵隊に入隊、翌八月に本陣三原屋で中根一行を襲撃、逃げる中根を追って中ノ関沖の洋上で斬殺したと伝えられている。中根市之丞の墓は満ち

潮になると通えない中ノ関の磯辺に建っている。

IV 元治・慶応年間

元治元年（一八六四）二月二十一日、『徳山藩史』によると、徳山藩が萩藩に従い、領内の一里塚を撤去して常盤木を栽植、幕府隠密の入国を警戒した。

六月二十七日、寺島忠三郎は家老福原越後の兵として京都山崎天王山に駐屯、七月十九日、御所南の堺町御門を攻め鷹司邸の裏門から侵入、邸内が炎上し始めた夕刻、久坂玄瑞と刺し違えて自刃したと伝わる。修史家中原邦平著『忠正公勤王事蹟』には最期を見届けた中小姓兼田義和によると、次のようであった。

『邸内の残兵は久坂さんの指示を受け裏門へ走ったが、寺島さんは頑として動かなかった。あの御二人が割腹された場所は御局口に相違ありません。久坂さんは流れ弾が左の太腿に当たって傷を負っておられ、お逃げなさることは出来ませんが、寺島さんは傷がないから「お逃げなされ」と勧めましたが、「いや、どうしても久坂と一緒に死ぬ義理合いだから、最期を見届けてくれ」という

ことで御局口で従容としてご自害なされました。そのうちに火がかかったから私は逃げましたが、鎮火の後御二人の自害された場所に行ってみると焼け残りの骨があったから、その骨を壺に収めて一乗寺の詩仙堂に埋めました」（原文を一部修正）

慶応元年（一八六五）四月十九日、幕府は第二次長州征討を決定、諸藩に出兵を命じた。ところが徳川御三家を筆頭に多くの諸藩が反対の意を示した。ことに薩摩藩は長州征討の出兵を拒絶することを直後の五月に決定している。

四月、徳山藩士藩民の有志二百三十人で山崎隊を編成、いつ幕府が攻めて来ても戦えるよう準備が進められた。内訌戦で正義派が勝利した後に、徳山藩の藩論が転換したのは、宍戸備前と前原一誠が藩主毛利元蕃に強硬に詰めよって、山崎隊の軍事力を背景に政権の交代を実現させたからである。

慶応二年（一八六六）一月四日、宍戸磯（たまたま）（山県半蔵）が長防臣民合議書を草案、萩土原で製本して長州藩全域

に配布した。冒頭には三十六万部発行とあるが、実際は数千部とも云われている。全兵士がこれを懐にして戦に立つという記述が見られる。

当時長州は長防臣民国と呼ぶ独立国体制を取っており、藩の冤罪を晴らすことで正当性を訴え、改易されても真実を語り継ぐ決意が伺える。これによって民衆の危機意識が増大、その不満は士族から幕府に向けられ、領内で続発していた一揆が収束、さらに志願兵が増加、駐屯地の提供や諜報も盛んになった。

四境戦争で藩境を封鎖され農漁業に欠かせない伊勢暦が入手できなくなると、花岡の和算家弘鴻が独自に太陽暦を推考し、立春を年の初めとする暦を作成、知人の所務代官を通じ萩藩に建議した。当時は暦を作ることは重罪、そのため萩藩が略暦に作り直させ、農業用の『種蒔の栞』として人民に頒布、庶民から重宝された。なんと明治政府が太陽暦を採用する七年前のことである。

六月七日、幕艦第二長崎丸が上関・大島安下庄・油宇を次々に砲撃、翌八日松山藩軍が安下庄を砲撃、その後

幕府軍が島の北側の久賀に上陸、松山藩軍は南側の安下庄に上陸して周防大島を占領した。

六〇九月、この頃徳山藩は四境戦争を受けて徳山藩兵隊病院を設置した。

六月二十一日、今日政事堂より高杉へ諸口で勝利の報知あり、昼過ぎに大庭始め報国隊より四人が入来、また福田良輔、了庵、徳山藩士遠藤貞一郎が小倉襲の事を訊ねに来る。遠藤貞一郎は後の山崎隊参謀で奇兵隊士久我四郎の兄である。

なお白石正一郎日記の原文には、遠藤貞一と記されている。

小倉戦争赤坂の戦いで、熊本藩兵をはじめとする幕府軍を震撼させ、壮烈な最期を遂げた山田鵬輔は周南出身の奇兵隊士である。

山田が戦死した七月二十七日の奇兵隊日記は珍しくも長文、この日記と医師藤村忠明氏による『山口市佐山の歴史』と照らし合わせると次のようである。

七月二十七日早朝、唐戸の亀山八幡宮下から出航した

長州軍四百名は門司の白木崎に上陸、大里を突破すると馬寄Ⅱ新町Ⅱ藤松の三方向から侵攻したが、熊本藩家老の長岡が赤坂鳥越峠で陣營を構えて指揮する新式の大砲、さらには海上からの艦砲射撃に進撃を阻止され、思うに任せない状態に陥った。

峠の高台から新式の大砲で狙い撃ちされた長州軍、後ろに下がることを知らない勇猛な報国隊も青ざめ、隊長の福原和勝が口にした。

「あれは佐賀の大砲ではないか？」

この大砲の爆発音はそれまでのどの大砲より凄かった。大砲が爆裂する音を間近で受けると、勇猛な兵士でも戦意と気力が抉えぐられる。

この佐賀の大砲とは佐賀藩士秀島藤之助が開発したアームストロング砲だと推測されているが、戦時中の金属類回収令で供出されて検証不能である。

第一小隊長山田鵬輔は鳥越峠から発射する熊本軍の砲撃に正面突破を諦め、東側に迂回し木が生い茂る忘言亭山の高台上に登り、峠の上から一気に熊本陣地まで駆け降

りる作戦を立てた。鵬輔は怯ひるみがちな軍の先頭に起って、赤禪一丁真っ裸のまま樹間をよじ登り、抜け出た高台が敵陣の手前であった。

太刀を手にした山田隊長を先頭に「決死で進め！」と声鋭く叫んで小隊は敵陣へ肉薄、熊本藩兵を薙ぎ倒していった。しかし銃身が山田隊長に向けられ、銃弾が胸部を貫通、壮烈なる最期を遂げた。このとき銃隊司令の阿部宗兵衛が山田隊長の首級を斬り落とし、これを抱えて大里の本陣まで退却したが、途上負傷して吉田の野戦病院で死亡した。山田小隊の戦死者は隊長を含め十五人、手負いは二十二人であった。

おわりに

このアームストロング砲は佐賀藩が開発した新式の大砲であって、英国製のアームストロング砲ではない。後にこの大砲は戊辰戦争でも使われた。では、どうして佐賀藩は新式の大砲を造れたのだろうか。鍋島閑叟の父は文化五年の英艦フェートン号事件が起こって以来、長崎出島周辺の防衛を任されていた。この防衛には膨大な費

用が必要で佐賀藩の財政を逼迫ひっぴくさせた。

そのため西洋の科学技術には強い関心を示す鍋島だったが、戦争は大嫌いで、完成した新式アームストロング砲の実践配備は断じて許さなかった。ところがその新式アームストロング砲が小倉戦争に登場したのである。どうして参戦してもいない佐賀藩の大砲を熊本藩兵が配備できたのか？謎である。

英国の技術者ウィリアム・アームストロングが軽量で機動性の高い大砲の開発に乗り出したのが嘉永七年（一八五四）、ちょうど松陰が米密航を企てた頃である。機械設計が専門の彼はその翌年に試作品を完成させ、特許を得るとすぐ陸軍に採用された。ところが彼はその特許を政府に譲渡して男爵の称号を得たのである。そこには設計者にしか分からない悩みがあった。砲弾を込める尾栓部分が不安定で、かなりの確率で暴発するという欠陥品、その原因は尾栓を固定する部分がボルト方式だったからである。やがて注文はキャンセル、一旦はお蔵入りとなった。

欠陥品による事故とえば、文久三年（一八六三）七月二日夜明け前、英艦隊が薩摩の軍艦三隻を拿捕して勃発した薩英戦争でも明らかになった。

同日午後三時頃、薩摩の発した砲弾が旗艦ユーライアラス号の甲板に命中、被弾した艦長と副長は軍議室から転落し死亡した。居合わせたキューパー提督も転落して左腕を負傷した。このとき英国は幕府から東禅寺事件と生麦事件で得た賠償金を積んでいたが、これが邪魔をして、肝心の弾薬庫が開かず、反撃できなかった。そして欠陥アームストロング砲一門が暴発して戦死者と負傷者を増やしてしまったのである。

参考文献

- 『徳山藩史』『徳山市史』『下松市史』『熊毛町史』
『定本奇兵隊日記』……田村哲夫著（マツノ書店復刻版）
『幕末の鑄物の大砲』……中野俊雄著（鑄造工学論文）
『防長回天史』……末松謙澄編纂
『毛利十一代史』……大田報助著
『海事集録』……ロシア海軍省機関誌

(一八四九年第一号)

『長防臣民合議書』……………山県半蔵草案

『佐山 第三号』……………佐山地区史研究会編

『山口市佐山の歴史』……………藤村忠明著

『もりのしげり』……………時山弥八編(旧長藩諸隊表)

『忠正公勤王事蹟』……………中原邦平著

『浦鞆負日記』……………浦鞆負著

『白石正一郎日記』……………白石正一郎著

掲載写真

○アームストロング佐賀安式砲

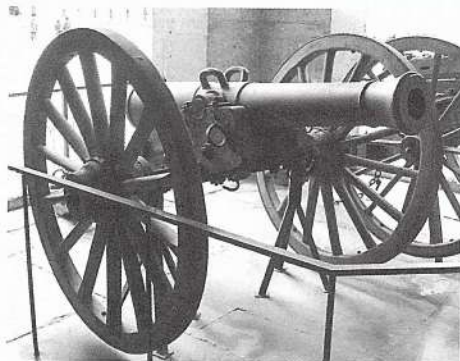
佐賀市松原・佐嘉神社

○弘鴻の石碑

下松市花岡・花岡八幡宮参道脇

○玉垣 山田鵬輔

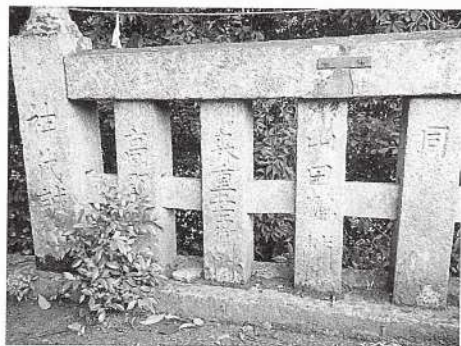
山口市佐山



アームストロング佐賀安式砲



弘鴻の石碑



玉垣 山田鵬輔